



Title	<書評>GilloDorfles : Gute Industrieform und ihre Aesthetik, Munchen 1964
Author(s)	宮島, 久雄
Citation	デザイン理論. 1968, 7, p. 111-114
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/52506
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

書評

Gillo Dorfles:

Gute Industrieform und ihre Aesthetik,

München 1964

Original title:

Il disegno industriale e la sua estetica,
Bologna

日本でも外国でも、デザインの技法書は多くあるが、理論書は少ない。その数少ない理論書の中で、古典となってきたのは、この夏に死んだハーリード・リードの「工業美術（邦訳題インダストリアル・デザイン）」であった。1932年に初版が出たこの本は、その後数回改訂されたとはいえ、理論的前提の点で年代的に制約されていることは明らかである。インダストリアル・デザインという邦訳題につられてこの本を読みはじめた読者は、この本の例に陶磁器、ガラス器など手芸品であるものが主にとりあげられているのを見て、恐らく面くらうだろう。

このような現実とのくいちがいに対し、かつここから出発して、それを訂正するような立場の理論がでてくるのは、1960年代の今日においては当然であろう。ここにとりあげるジルロ・ドルフレスの「工業デザインとその美学」は、はっきりリードの理論を訂正することを目的にして書かれたものである。

リードの理論的背景には、ギーディオン（主著「空間・時間・建築」の初版は1941年であるが、その基礎となった「フランスの新建築」は1928年に出ていた）、ペヴスナー（主著「モダンデザインの展開」の初版は1936年）さらにグロピウスのバウハウス（1919年～1928年）などがあるとすれば、ドルフレスの背景には、ベンゼ（「美学」1954）、モール（「情報理論と美的知覚」1958年）さ

らにはマルドナードのウルム造形大学（1958年～1967年）の動きがあるといえう。

著者ジルロ・ドルフレスは1910年生まれ、現在イタリアのトリエステ大学の美学の教授である。その活動は巾広く、著作活動ばかりでなく、講演や会議によく出席している。主著は「芸術技術論」（1952）であるが、ほかにデューラー、ファイニンガー、ヴォルスなどの作家研究から、「趣味の変化」「芸術の生成」「現代芸術の傾向」などの芸術学の論文、さらには「現代建築におけるバロック」「現代建築」など建築の本も書いている。最近では、「シンボル・コミュニケーション・消費」（1962年）という本で、ドイツのベンゼにならってデザイン理論にとりくんでいる。ここにとりあげる本書（原著）も、恐らくこの本とあい前後して出版されたものらしい。

さて、本書の主眼点は、前述したように、リードが手工芸を包含する工業美術論を展開したのに対して、手工芸と建築を除外するような工業デザイン論である。建築を除外するという点では、同じイタリア（ローマ大学）のアルガンの理論に対置するものもある。

本書の位置づけはおおよそ以上のとおり。次に内容に移る。ドルフレスによると、工業デザインの条件は次の3つである。 1) 量産の可能性があること 2) 機械製品であること 3) 前もって行われる設計に含まれていて、あとで手で加工できないような美的要素が存在すること。工業デザインはこの3点において、手工芸から完全に分離され、量（Serie）と標準（Standard）とが大きな意味をもつようになる。しかし、手工芸や建築が除外されているとはいへ、この限りではアルガンやバウハウスの理論とまださほど次元を異にするわけではない。

著者がベンゼやモールと同じ次元に来るのは、工業デザインを手工芸のような作品の質の立場から眺めるのでなく、情報理論的立場からアプローチするときである。いいかえると、作品（ないしは製品）は用即美といった立場からで

はなく、機能等を表現し伝達する情報の立場から把握されるときである。

この立場をとることによって生じるいちぢるしい現象は、スタイリングや流行を肯定することである。リードの立場からは、これらは絶対に肯定できないことであった。かつてイギリスの建築評論家バンハムはスタイリングを民衆芸術とよんで、肯定しようとした(1955年)。ドルフレスはこれをうけて、スタイリングのもうひとつのポジティブな側面、つまり生産一販売一消費という経済的側面に注目し、そこに製品の美学と生産とを結合する媒介的な性格を見出している。スタイリングのこの性格は、工業製品に一般的なものであって、アメリカにのみ固有の現象ではない。ソ連にもやがてスタイリングが現われるだろうといっている。

つづいて著者は、宣伝、模倣、チームワーク、市場調査等についてのべたあと、工業デザインの分類を試みている。ここでも著者は、将来用途をもたないもので量産されるものがあらわれるといっている。これはプログラマティックな品物とか作品とかよばれているが、要するに美的側面だけを追求したものだという。将来のものだから、例はあがっていないが、面白い問題のようだ。

最後の課題、教育、それに付録の歴史の章にはともに特にとりあげるべき問題はない。手工芸と工業デザインとをはっきりとわかる著者の立場からすれば、工業デザインの成立は1930年前後のアメリカであるはずだが、(林進編「現代デザインを考える」を見よ)、やはりウイリアム・モ里斯からはじめているのはややあいまいだといえよう。

とにかく本書の論点は何といっても、最初にあげたように、情報理論をもとり入れて工業デザインを新たな角度からとりあげ、それによって工業デザインの範囲を明確にし、現象としてのスタイリングにも新しいポジティブな性格を見出していることがある。ただ、本書はエッセイ風であって、これらはスケッチにとどまっている。この理論の精緻な展開は「シンボル・コミュニケーション・消費」にゆずられているようだ。

本書の原著はイタリア語である。原著とてらしあわせたわけではないが、ドイツ語本は理解しにくい。原著が難解なのか、あるいは訳者がデザイン理論にあまり通じていないかのどちらかであろう。また図版も、大きく枚数も多いが、そのわりに本文とまったく無関係であるのは、おしいことだといわざるをえない。ただ参考文献には、イタリア以外にも目新しいものが多く、この方面では大いに参考となる本である。

大阪芸術大学 宮島久雄